多様なニーズに挑む 岡山協立病院の真価

④ 患者さんの生活に寄り添う透析医療

岡山協立病院透析センター長 **橋本　彰**

透析治療と聞くと、「通院が大変そう」「生活が大きく変わってしまうのでは」と不安を感じる方も少なくありません。しかし、体調管理や生活面の支援が整っていれば、患者さんの負担を和らげながら、安心して治療を続けることができます。岡山協立病院では総合病院の強みを生かし、透析治療だけでなく患者さんの体や暮らし全体を支える医療に取り組んでいます。

■なぜ透析医療に総合的な取り組みが必要なのか

近年、糖尿病性腎症や腎硬化症などをきっかけに、透析治療が必要となる患者さんが増えています。透析を受ける方の中には、心臓や血管の病気を併せ持っている方も多く、腎臓だけを診るのではなく、全身を総合的に管理することが大切です。近年、下肢の末梢循環障害を併せ持つ事例が増えてきており、また高齢化に伴い、皮膚トラブルや転倒によるけが、足の傷などにも注意が必要です。

はしもと・あきら　岡山大卒。1992年、岡山協立病院に入職。94年、川崎医科大腎臓内科を経て、95年に岡山協立病院に帰院。2008年4月から透析センター長。日本内科学会認定医。

透析治療を担うスタッフ。全身の管理に注意を払う

35床を備えた透析センター

■安心の医療体制

当院では、こうした透析患者さんのさまざまな不安に対応するため、複数の診療科や専門職が連携しています。皮膚科では、透析患者さんに起こりやすいかゆみや皮膚トラブルに対応し、褥瘡（じょくそう）対策チームや栄養サポートチームも関わりながら、栄養状態の確認や床ずれの予防・治療を行っています。

中でも力を入れているのが、足を守る「フットケア」です。透析患者さんは血流が悪くなりやすく、小さな傷が治りにくいことがあります。そのため、月に一度、全ての透析患者さんの足の状態を確認し、傷や皮膚の変化を早期に発見できるよう努めています。必要があれば循環器内科と連携し、血流の検査や治療につなげています。

また、岡山協立病院が大切にしているのは、病気そのものだけでなく、患者さんの生活背景まで含めて支援することです。入院された患者さんには、退院後の生活で困りごとが生じないよう、早い段階からケースワーカーが関わります。家族構成、経済的な不安、通院手段などを丁寧に確認し、一人一人に合った支援を考えます。

透析センターは2017年10月に新築リニューアルし、35床のベッドをゆったりと配置しています。テレビや室内BGMなど、治療時間をできるだけ快適に過ごしていただける環境も整えています。

■地域のハブ病院として

岡山協立病院は今後も急性期医療に力をいれながら、治療を終えた患者さんが安心して在宅生活に戻れるよう支援していきます。地域の開業医や関係機関とも連携し、患者さんが住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられるよう支えていきます。

透析治療が必要になっても、適切な医療と支援があれば、その人らしい生活を続けることは十分可能です。岡山協立病院では、医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士など多職種のスタッフが一丸となり、患者さんとご家族の安心を支えています。

◇

岡山協立病院（086―272―2121）

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。